

ど、今は連龍まるり、此度死なんと存ず。されどもたゞ退いては傍輩の思はん所も無念也。また黒瀧殿も道理を知らぬ人にてなし。此趣を黒瀧殿へ直に申入れ、其上に若し罪科に逢ふとも悔なきものとおもひ定め、黒瀧の前へ出で、始めよりの存念残らず申しけり。與市聞いて、いさぎよし。早々あれへ参るべし。但し明日其方が首は某取るべし。随分働き候へとあざ笑ひて申渡す。只今の言葉必ず忘れ申すな、いさ最後の盃せんとて、與市三盃呑んで平左衛門にさしければ、平左衛門畏つて頂戴し、御意之趣難有奉存。此上は早敵味方也。然らば慮外御免被下と、與市へ盃をさしければ、與市快く吞まれけり。其時平左衛門申しけるは、明日是へ参り、若し亂軍に成候ても、乍恐御首は必ず私取可申。暫く主君と頼みし事なれども、御免被下候へと申しければ、與市申すまでもなし、互の事也と有りければ、平左衛門畏候とて、一座の者にも禮儀をのべ、連龍の方へ急ぎけり。天晴なる武士哉と感じけり。さて連龍の前へ行き、始終の事共語り出して、泪は袖をほしあへず。とかくする内に夜も明方に近付きぬれば、時分は能き

ぞと云ふまゝ、物見を出し、小林は先手に加り、棚木城へ押寄せけり。互に銃炮はじめつゝ、程なく鎧・太刀打に成りぬれば、黒瀧が備くづれ立ちて同士打す。與市甚だ怒つて、大勢の中へ懸込み、四角八方に切まくり、暫く休み居たる時、小林平左衛門走せ來り、太刀打は慮外也、力だめし仕らんと懸懸り、むすど組み、終に與市を取つておさへ、心の内に観念して、あへなく首を打落し立退かんとせしが、急度案じけるは、與市と連龍と未だ逢はれし事あるまじ。若し疑心有りては高名しても詮なしと、則與市が帶せる刀を取り、是を添へて實檢に備へたり。此刀は甚だ隠れなかりしかば、一入連龍感じつゝ、手に持ちける扇を平左衛門にとらせけり云々。織田軍記に云ふ。天正十年の春、信長公甲州表出馬に付、越後の景勝其隙を伺ひ、越中の國人を相語らひ、一揆を起させ魚津城に楯籠る。依つて柴田勝家・佐久間盛政・佐々成政・前田利家の四將、越中へ發向し魚津城を取巻きけり。景勝、長與一郎景連と云ふ者に人數を差添へ、能州へ渡海させ、彼國を掠取らんとす。此告を聞き長九郎左衛門連龍を遣し、彼敵を防がしむ。連龍即手勢を

將る、魚津より能登へ歸り入り、棚木城に於て一戦に打勝ち、敵將景連を討捕りて、殘黨を追拂ひ、能州を平治せしむ。連龍一分の武功、遠近に是を褒めけりと。三州志隄藪餘考に云ふ。連龍即ち兵一千を將りて、五月十三日魚津を發し棚木に赴く、既に棚木に到り、廿二日平旦より攻城す。長與市景連正門の廓外へ進み苦戦す。鈴木因幡は背門を進攻するに、景連また背門外へ出で血戦し、鈴木等一旦敗走すれども、回撃して再び城兵を挫き、未の刻に及んで城中へ亂入し、景連と鈴木源内と接撃し源内疵を被るを、小林平左衛門之を見て救ひ來り、遂に景連を討取り、景連が帶せし氏房の刀を斬首に副へて、小林之を出す。即ち此の原委を魚津へ言上す。重ねて兩使を以て、景連が首を翌廿四日實檢に入れ、安土へも注進す。註に云ふ。與市大剛の者、初め鈴木因幡と交双し、因幡くみ敷ける處へ小林馳せつき、與市を討取ると也。小林は此前日まで與市に仕へ、前日暇を乞ひ、連龍に歸すと也。即ち今の長氏の家臣小林平左衛門の祖也。又右氏房の刀は、按ずるに世に所謂丈木の刀なるべし。此文木の刀は、能州靜謐の後連龍之を國祖へ

獻じて、今公庫にあり。一説に、丈木とは銘に定義とあるゆゑとぞ。此説信用すべからず。一書に、此刀無銘にて三所に切れありと、高田彌右衛門語るとあり。平次按ずるに、葛巻昌興自記に、天和二年四月七日昨日於御館丈木之御腰物初て拜見之。長さ二尺一寸五分、中切先にして樋有之、たいはいひらわなり。是は元能州の黒瀧之長某より傳來、無比類物切なり。其儀人口にあり。と記載す。前田家傳來名物刀劍書狀帳にも、丈木刀と載せたり。

○遊佐藏人傳話

信連記に云ふ。長對馬守の息女は、遊佐孫八郎忠清に嫁す云々。如庵館の濱に居住の時、松枝と云ふ年寄りたる女、才覺者ゆゑ與方に用事共勤めけり。或時松枝、小袖など染めさせんため紺屋へ行きければ、さもむくつけなる男、釜の火を燒きて居けり。其身つゞりさき織を着て、松枝が顔をつくんゝとまもりたり。松枝おそろしながら心をとめて見ければ、其のむかし介抱せし遊佐孫八郎が子息藏人なり。孫八郎は石動山天平寺合戦に討たれ、孤子と成り、かゝる身とは成行きけり。松枝館の濱へ歸りて、如庵へ申し